論　文

ニュルンベルクの旧市街

── その歴史と保存の意義 ──

服　部　尚　己
同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
教授

Altstadt von Nürnberg

── die Geschichte und die Bedeutung ihrer Erhaltung ──

Hisami Hattori
Department of Social System Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

1．はじめに

ニュルンベルクは現在、バイエルン州でミュンヘンの次に人口の多い大都市である。人口20万人前後の町が多い中で、ニュルンベルクの人口は現在50万人である。これはニュルンベルクの旧市街が、すでに19世紀にできた人口の多い町や村によって囲まれていたことが原因である。「居住区域は広大な工場地帯へと変わってゆく。アウグスブルク・ニュルンベルク機械工場（MAN）やジーメンス・シュッケルト製作所のような大企業がニュルンベルクをバイエルン最大の工業都市にした。そのためニュルンベルクへの人の流れが起こり、それは第一次世界大戦後も続いたのである。」[1] こうしてニュルンベルクはバイエルン州で第二位の大都市という現在の姿になった。しかし、かつて市壁で囲まれていた旧市街はさまざまの変遷を経ながらもそのままに保たれているのである。ドイツのほとんどどの都市においても実施されているこの旧市街の保存の意義を、ドイツの歴史的都市ニュルンベルクを例にとり、見ていきたいと思う。

2．皇帝の町としてのニュルンベルクの歴史と旧市街（Altstadt）

「都市ニュルンベルクのルーツは、ペグニッツ川をはさんでそれぞれに発達した二つの集落であった。一つは、城砦の南斜面の下に発生し、奇蹟伝説と結びついた聖ゼバルドゥスの墓の存在によっても人びとを惹きつけて大きくなり、やがてペグニッツの畔に達したもの。12・13世紀には聖ゼバルドゥス教会も建立されて集落発展の核となり、市の教区教会となった。いま一つは、ペグニッツの左岸（南側）に12世紀中葉以降、フリードリヒ１世赤髭王の建設と推定される王宮に接して発生し、聖ローレンツ教会（13世紀末から14世紀に建立）を核として発達したものであった。両者ともに強力な市壁による防備をほどこしていたが、1320～25年以降になると共通の防御施設で結ばれるようになる。」[2]

ニュルンベルクはドイツのなかでも皇帝の居城（Kaiserpfalz）があった都市として古い歴史を誇っている。シュタウフェン朝の皇帝コンラート３世が都市の建設を進め、ここで宮廷会議を開催した最初の皇帝となったと言われている。これが12世紀の前半である。さらに皇帝フリードリヒ２世が1219年に発行した大特許状（der große Freiheitsbrief）がニュルンベルクを例外的な町にした。大きな経済的な特権を獲得したのだった。そして13世紀の中頃にこのシュタウフェン朝が断絶すると、町は今までのような軍事的保護が望めなくなり、ニュルンベルクは政治的にも経済的にも自立し、強力な市壁によって囲まれることになった。1256年に上層市民によって構成された参事会がで

きた。その後は皇帝から様々な特権を引き出し、さらには帝国自由都市の特権まで獲得することになった[3]。立地の良さとカイザーブルク（皇帝の居城）の堅固さにより、ニュルンベルクは世紀を越えてドイツの皇帝に愛された滞在地であった。

また、多くの帝国議会が開催された都市でもあった。特にバイエルンのヴィッテルスバッハ家出身の皇帝ルートヴィッヒ４世は帝国直属都市としてこの町との強い結びつきを求めた。そして1322年に経済発展に特に重要な免税権を与えた。さらにルクセンブルク家のカール４世はここで「ドイツ人の神聖ローマ帝国」の基本法である「金印勅書」を発布した。その息子のジギスムントは1424年にこの都市を帝国の宝物（王冠、王笏など）の恒久的な保管場所に指定し、それは聖霊教会 Heilig-Geist-Kirche のなかに保管されることになった。そして復活祭の時には中央広場で帝国の宝物が民衆に公開された。そのためそれは春の見本市と合わさって多くの商人や訪問者を呼び寄せる行事になったのである[4]。

この華々しい歴史が現在の都市ニュルンベルクに刻印されている。（図１参照）そしてそれを巡るのが観光の大きな目玉となる。「歴史地区」（Historische Meile）のルート[5] は中央駅から始まり、ケーニヒ通りをゆき、この町で最も大きく美しいとされる後期ゴシック様式の聖ローレンツ教会を通って、ペグニッツ川に行き着く。ここから見るペグニッツ川にまたがって立つ聖霊救貧院（Heilig-Geist-Spital）の眺めがこの町の一つのシンボルスポットである。この施設は1332年のある人物の慈善事業に由来している。当時の市長職のような地位（Schultheiß）にあった Konrad Groß なる人物が大変な金持ちであり、町のこの部分に土地を手に入れるや病人や貧者のための慈善施設をつくった。それには教会や墓地や学校なども付設された[6]。この教会が聖霊教会であり、ここに1424年から1796年の間、帝国の宝物が保管されたのである。第二次世界大戦によりニュルンベルクは大きく破壊され、この教会も破壊されたが再建されなかった。一方、聖霊救貧院の方は再建され、市の中心に位置する観光スポットになったのである。

さらに橋を渡って町の北側のゼバルドゥス地区に入ると、中央広場（Hauptmarkt）へとやってくる。そこには聖母教会がある。その先に旧市庁舎などの歴史ある建物があり、ここが町の中心地点である。その先にこの町最古の教会である聖ゼバルドゥス教会があり、さらに坂を登りきるとそこにカイザーブルクがあるのである。これが設定された「歴史地区」のメインルートである。

ここまで皇帝とニュルンベルクの町との関わり、それに町民とキリスト教との関わりのなかから生まれて来た町の歴史と町の姿を見てきた。このように歴史と町民の営為が結晶して集積しているのが旧市街であると言えるであろう。それでは次に、商業が発達して行く時代のニュルンベルクの町を見てみたい。

３．商人の町としてのニュルンベルクの歴史と旧市街

「1356年に公布された最も重要な帝国法『金印勅書』は、新たに戴冠した王は最初の帝国議会をニュルンベルクで開催しなければならないと定めた。この規定は以後ほとんど守られなかったけれども、『フランケンのローマ』は、指導的な都市であることの根拠とすることができた。1424年ジギスムント王は神聖ローマ帝国の宝物をニュルンベルクに保管させた。王冠、王笏、その他の聖遺物からなる帝国の宝物が以後、聖霊教会に安置された。ニュルンベルクが官房費まで払って得たこの宝物の委託と、それを年に一度中央広場で公開し、それに加えて14日間の見本市を開く権利とが結びついていた。これは、ニュルンベルクにとっては大きな意義をもっていた。町の富は、広い範囲の交易の行き来する商業路の結節点という恵まれた立地条件の上に築かれていた。」[7]

10世紀にはビザンツ帝国のヨーロッパとイスラム諸国との通商関係においてヴェネツィア・ピサ・ジェノヴァなどのイタリアの都市が中心的役割を担っていた。その後、インスブルックからアウグスブルク、ニュルンベルクを経てフランクフルトへ至る南ドイツの商業路が開拓され、胡椒、香辛料、砂糖、綿織物などのヴェネツィア商業の取扱品目が運ばれ、反対方向からは、ドイツ産の金属やハンガリー平野産の食肉が運ばれた[8]。ニュルンベルクはその立地条件の良さからこのような遠隔地貿易により潤い、商人の町としても名声を高めてゆく。その一方でニュルンベルク自身優れた職人の町へと育ってゆく。中でも針、鋲、ブリキ缶、燭台などの金属加工業が盛んとなり、商品として遠くの地まで運ばれた。現実感覚優れたニュルンベルクの小物商品は “Nürnberger Tand”（「ニュルンベルクのがらくた」）と呼ばれるようになった。そしてその技術は19世紀まで持続され、有名なニュルンベルクのおもちゃ作りへと引き継がれてゆき、“Nürnberger Tand” はおもちゃを指

すように変わっていったのである[9]。

さて、このニュルンベルクの優れた手工業の最盛期は、1480年から1530年頃であったと言われる。まさにこの時期に当たるこの町の市民が、靴職人であり職匠詩人（マイスタージンガー）であったハンス・ザックス（Hans Sachs 1494-1576）であり、画家のデューラー（Albrecht Dürer 1471-1528）であった。これは上昇期の市民の文化的エネルギーの発露とも言えよう。このようなエネルギーを孕んだ上昇期の都市であるからこそその市民の文化も栄えたと言える。今ではペグニッツ川の北側にある聖母教会の裏手にハンス・ザックス広場があり、そこに彼の記念碑が立っている。広場の一本北側の通りに、ザックスの家の跡がある。さらに町を北へ向かって歩いてゆき、坂を上りきったところにカイザーブルクがあり、その近くには画家デューラーの生家が今も残されている。

この時期ニュルンベルクの商業は隆盛を極め、その富によってこの町は「帝国の宝箱」と呼ばれた[10]。1431年の調査ではニュルンベルク市の人口は22,797人である。また家の数は3,585軒、4,213世帯で、一軒当たり４～６人住んでいたであろうと言う。さらに1478年の人口は約23,480人となると推定されている[11]。

４．19世紀、20世紀のニュルンベルクの歴史と旧市街

その後、大航海時代と植民地獲得競争の幕開けとともに世界経済の中心地が大西洋岸に移るにつれて、南ドイツの帝国都市は衰退の一途をたどり、やがて歴史の表舞台から退場していった。そして1806年、ナポレオンによる神聖ローマ帝国の解体にともないニュルンベルク市はバイエルン王国に編入された。この「主権を失って破産状態にあった落ちぶれた帝国都市」[12] はしかし、この時ドイツにおいて勃興期にあった工業の分野で再びチャンスを掴みとる。かつて得意とした付加価値の高い加工業分野での経済発展の端緒をここで開くことに成功するのである。1821年バイエルンで初の貯蓄銀行（Sparkasse）が設立され、また1823年には工業専門学校が開校された。続いて1835年、ニュルンベルク・フュルト間にドイツ初の鉄道が開通する。そしてニュルンベルクに多くの工場及び商社が設立された。二輪車、機械製造、鉛筆、菓子、玩具などの企業がここに立地した。そしてその立地した場所は、旧市街の外側に出来てきていたWöhrd, Gostenhof, St. Johannisなどの地区であった。（図２参照）

1841年鋳鉄製品の製造から出発したKlett & Comp.社が機械製造業へと発展し、Maschinenfabrik Augsburg-Nürnberg AG.となり、1908年にはM.A.N.社と名前を改め、今日ではミュンヘンを本拠地とする世界的企業となる。また、鉛筆製造で1835年に出発したシュテッドラー（Staedtler）社は今や世界的ブランドの企業となっている。さらに1860年代以降ニュルンベルクは二輪車の生産中心地となる。Hercules, Zündapp, Victoriaなどのメーカーである。また1875年J. Sigmund Schuckertが世界初の発電機（Dynamomashine）を開発した。ここから世界的企業Siemens-Schuckert GmbHや家電メーカーAEGができる。第１次大戦前ニュルンベルクは33万人の人口を持ち、帝国の中でも最重要な工業都市の一つになっていた。しかし旧市街は昔のままに保たれ、技術と文化、過去と現在、生活と労働がうまく調和して結びついていた[13]。

ところが次にやってきた第二次世界大戦の時代は、「皇帝に愛された町」との歴史が災いして「ヒトラーに愛された町」となり、ナチスの党大会が開かれた町として大きく歴史に名を残すこととなる。1927年と1929年の帝国党大会の巨大集会が旧市街の外側、市の南部のルイトポルトハイン（Luitpoldhain）で行なわれたので、その後もナチスの行事の場所としてここが使われた。ここには帝国党大会広場（Luitpoldarena）と帝国党大会会議場（Kongresshalle）が建設された。党大会会議場の広場は24.5平方キロメートルの広さを持ち、ニュルンベルクの旧市街の７倍の広さを持っていた。

「旧市街の外側にある工場は第二次大戦時の武器や戦争の用具の供与に模範的に協力した。まず何よりも先に伝統あるMANコンツェルンを挙げなければならない。フランケン通りにあったここの工場でトラックやエンジンを作っていただけでなく、戦車のPantherを製作していた。それゆえ連合軍の爆撃機に繰り返し爆撃されたのである。」[14] ニュルンベルクはこの「帝国の中でも最重要な工業都市」としての役割とナチスにとってのその象徴的な意義のために激しい爆撃の目標となった。旧市街は80％が破壊されるという被害を受けたのち、1945年以降、カイザーブルク、教会、市庁舎などの大きな町のモニュメントが再建された。戦後間もなく、困難な時期を乗り越えるとドイツ経済は上向き始め、「奇跡の経済復興」をとげる。それにはニュルンベルクの企業も重要な役割を果たしたと言われる。AEG, Grundig, MAN, Schöller, Siemens, Triumph-Adlerなどなどである。さらに1950年以来毎年開催された玩具見本市（Spielwarenmesse）も重要な働きをし

た。1955年にはニュルンベルク国際空港が開港し、1967年には地下鉄の建設が開始され、さらには1972年のマイン・ドナウ運河の完成、1973年の見本市センター完成など、将来に合わせたインフラ整備を着々と進めて来たということが言えるのである。

ニュルンベルク市は周辺に広大な土地をもっていたが、旧市街の市壁の外へと居住地が広がり始めたのは、19世紀に入ってからである。しかしながら産業の時代になって「バイエルン最大の工業都市」となる基盤となったのは、このような市壁の外にできた「人口の多い町や村」であった。しかも市が外へとそのように広がった時でも市壁は維持し続けた。市壁の中のアイデンティティは守りつつ、産業革命後の世界にもみごとに対応したのである。それは「商人の町」特有の優れた時代感覚であったのかもしれない。それゆえニュルンベルク市の人口は、第二次世界大戦前には42万人に達していた[15]。

5．現代の都市ニュルンベルクと旧市街

「市の境界地区に1933年から1939年の間に20以上の団地が建造された。ドイツの田舎風一戸建て形式、あるいは二戸建て形式の家屋による団地や、統一されたファサードが道路側に見られる大都市風の集合住宅による団地などが。そして新しい居住区域の住民のために教会や学校がつくられた。この1930年代の団地が今も残ってはいるが、家々は改築によりしばしば大きな変更を受けている。例えば、Teutonenstraße の団地や市の境界にある Gebersdorf の団地、ノルトオスト駅周辺の住宅街などがそれに当てはまる。」[16] このようにして19世紀初頭より旧市街の外側に向かって広がり始めたニュルンベルクは、産業が栄えたお蔭もあって大きな都市周辺地域（Umland）をもつに至った。2011年12月31日現在の統計[17] で、ニュルンベルクの旧市街に当る二つの地区のうちローレンツ（St. Lorenz）地区の人口は4,893人、ゼバルドゥス（St. Sebald）地区は8,866人である。また19世紀前半の産業の勃興期に旧市街の外側にその工場等が立地した Wöhrd 地区には9,524人、Gostenhof 地区には8,386人、そして St. Johannis 地区には7,734人が住んでいる。さらに膨張したニュルンベルク市のはずれに当る地区 Gebersdorf には1930年代の団地が今も残っており、4,223人が住んでいる。そして合わせて97の地区（Bezirk）に503,402人が住んでいるのである。これが現在のニュルンベルク市の姿である。

それでは戦争で80％が破壊されたという旧市街は第二次大戦後、どのようにして再建されて現在の姿になったのだろうか。

ドイツにおいてその再建方法は多岐にわたった。「歴史的建築物をあくまで守るのか」「破壊されてなくなったオリジナルをコピーすることは許されるのか」「まったく新しい始まりを志向するのか」等の議論が渦巻いたからである[18]。しかし急いでなされた再建は、おおむね都市の歴史的構造に従って行なわれた。それは地下の工学的なインフラが無傷であったことによるものであった。しかしこの再建もヨーロッパの16の国に対して行なわれた再建計画であるマーシャルプランの援助があって初めて可能となったものであった。そしてニュルンベルクの旧市街の再建はドイツにおいて「歴史的景観とそれにふさわしい町並みの再建」の数少ない例となった[19]。カイザーブルク、教会、市庁舎などの大きな町のモニュメントは元通り再建された。そして破壊された市民住宅は新たな市民建築で置き換えられたのであった[20]。「第二次大戦による広範な破壊の後に再建されたドイツの都市は根本的な変容を受けた。西ドイツでは、1948年の通貨改革後まもなくして市場経済の原理の下に予期せぬ躍進が始まった（経済の奇跡）。個々の自治体の政治家たちは中心市街地の再建の計画を立てたが、それは車社会という将来像に沿ってつくられたのだった。」[21] その結果、ドイツの中心市街地である旧市街も車によって占領されて行ったのだった。ところが「1970年代から機能主義的なモダニズムよりも強くアイデンティティを感じさせる中心市街地の方が人々により高く評価されるようになった」[22] というような風潮の変化により、ドイツの都市において中心市街地からの車の排除が進み始める。すなわち歩行者専用区域の拡大が進行するのである。ニュルンベルクにおいても1971年の第一段階においては、「中央広場」Hauptmarkt とローレンツ地区の買い物ゾーンとなっている通りの Breite Gasse のみが歩行者専用区域であったのが、第三段階（1982年）ではローレンツ地区の買い物ゾーンのさらに二本の通り Karolinenstraße と Kaiserstraße、およびローレンツ地区とゼバルドゥス地区の二つの地区を結ぶ Museumsbrücke と Fleischbrücke の二本の橋が歩行者専用区域となる。そして第六段階（1992／96）においては既に駅からカイザーブルクの広い範囲に渡る区域が歩行者専用区域となるほぼ現在の形と同じになったことが Monheim の論文の中で地図が添えられて報告されている[23]。そしてそれは第２章で確認した「歴史地区」Historische Meile の区域とほぼ重なりあっている。「ニュ

ルンベルクの歩行者専用道路は約9km に渡る道路網を形成している。それが、ほぼ完璧な破壊の後に歴史的基準に則って再建された旧市街に今日的な生活スタイルに合った伝統と新しさの融合を作り出すことを可能にしている。Karstadt（24,100m^2）に率いられた多くの大店舗に加えてさらに1999年から2002年にかけて二つのショッピングゾーン（ECE 12,200m^{2}と Bahnhof 10,000m^2）と Brenninger ができた。Wöhrl は3,000m^{2}拡張して売り場面積15,000m^{2}となった。そして中央駅には Intersport の巨大店舗（5,500m^2）ができた。様々な中小店舗がうまく互いにネットワーク化され、ショッピングストリートに配分され、大店舗の及ばない部分を補っている。」[24]

このようにニュルンベルクでは、中心市街地である旧市街が居住機能においても、商業機能においても活性化されている。商業機能に関しては上記引用の如くであり、また居住機能に関してはローレンツ地区とゼバルドゥス地区を合わせた人口は13,759人となり（2011年12月31日現在）、中世の商業が隆盛を極めた時代には及ばないもののそれなりの居住人口を抱えているということができるであろう。

6．旧市街と「文化地区」

ドイツでは近年どの都市の中心市街地（旧市街）においても歩行者専用区域がつくられ、またその区域が拡大される傾向が続いている。そしてそれとともに、ニュルンベルクの例に見られるように「商業や娯楽の機能が歴史的な中心市街地へと集中化されて」[25] いる。それはニュルンベルクの住民にとってこの旧市街地の魅力を高めるものであると思われるが、またここを訪れる観光客にとっても同じことが言える。「生活スタイルに合わせた商業が多様な娯楽産業によって補われている。それを担っているのは、歴史地区と文化地区である。増加する歩行者の数がその成果を証明している。訪問者が特に気に入っているのは、町の景観である（土曜日の訪問者の56％）。５人に一人の人が、歩行者専用区域、多様なショッピングと町の雰囲気あるいは人間を称賛している。」[26]

次にこれに関連する表を掲げる[27]。

歩行者専用区域が小さいために、旧市街地がそのポテン

表　居住地と来訪目的（1996年から2000年間において、数値は％）

	ミュンヘン		ブレーメン		ニュルンベルク		リューベック		レーゲンスブルク	
	平日	土曜	平日	土曜	平日	土曜	平日	土曜	平日	土曜
居住地										
市　内	45	38	70	52	56	48	68	70	56	51
郊　外	24	16	14	15	21	17	10	16	29	29
地　方	8	7	5	9	5	5	4	4	5	6
遠隔地	22	39	11	24	17	30	18	10	10	14
来訪目的										
買い物	78	84	82	93	77	87	80	78	78	84
勤務・学校	22	7	17	1	19	6	18	12	22	7
公　用	7	4	7	2	9	2	3	9	7	4
私　用	19	7	24	5	25	7	21	10	19	7
住んでいる	3	4	2	3	7	6	17	15	3	4
娯楽目的	68	81	58	70	66	72	55	50	68	81
計	197	187	190	174	203	180	194	174	201	179
娯楽内容										
市内散策	47	63	40	53	50	59	43	35	46	62
喫茶・食事	37	46	27	24	36	43	16	14	31	35
運動、文化	23	33	9	9	19	17	11	9	14	12
観　光	11	22	5	11	8	12	12	7	12	7
計	118	164	81	97	113	131	82	65	97	116

シャルを十分に生かし切れていないという状況も起こりうる。上記の表では、リューベックがその例として指摘できる。平日より土曜日の「買い物」客や「娯楽目的」のレジャー客が減少し、「市内散策」をする者の数が少ないという他の４都市には見られない傾向から、この都市の週末のさびしい中心市街地の様子が思い浮かぶであろう。逆にニュルンベルクの「買い物」「娯楽目的」「市内散策」「喫茶・食事」の項目の数値は、大都市ミュンヘンに迫るものがあり、「広範で多様な飲食業がメインのショッピングゾーンに浸透して」[28] 魅力を高めている様子が見て取れるのである。また「遠隔地」の居住者がミュンヘンやニュルンベルクを訪れている数は、他の都市をかなり引き離して多いのが見て取られ、遠隔地からも訪問客を引き寄せる魅力を持つのはこの２都市であることがわかる。では、ニュルンベルクにおいてその町の魅力を高めていると思われる「文化地区」（Kulturmeile）の内容を次に詳しく見てみる。

これは1987年に当時の市長ペーター・シェーンラインがニュルンベルクにある文化的施設を1.6km（即ち１マイルである）に渡ってつないだ「文化の道」とでも言うべき構想である[29]。起点は中央駅の近くにある「ゲルマン国立博物館」である。建物の大きさ、収蔵品の多さなどから言っても世界最大級の博物館と言っていい堂々たる文化施設である。そしてそのすぐ近くに1994年に「人権の道」という記念施設がつくられた。第二次世界大戦中のこの都市の暗い歴史を忘れないための「過去の記憶を尊ぶ文化」を表現した施設である。さらにその近くには1899年建設の「ドイツ鉄道博物館」と1906年建設の「オペラハウス」がある。次が中央駅の前に2000年に開館した「新美術館」であり、これはバイエルン州により寄贈された「現代芸術とデザイン」に特化された美術館である。その続き、六番目の施設はニュルンベルクの旧市街の東の縁を歩いてゆくと見つかるものである。同時代の作品の展示が行われる「市立博物館」（Kunsthalle der Stadt）と新聞閲覧カフェなどのこの町の訪問者にも魅力の空間をもつ施設「市立図書館」（Stadtbibliothek）である。さて、最後の八番目にリストアップされている施設が、「Cinecitta（シネチッタ）」という名称をもつシネマコンプレックス（複合映画館）であり、これが市立図書館のすぐそばにある。第２章で紹介した「歴史地区」のルートが中央駅から聖ローレンツ教会、さらにはペグニッツ川にまたがって立つ聖霊救貧院、中央広場、聖ゼバルドゥス教会、さらに旧市街の北部に位置するカイザーブルクを網羅し、そこから旧市街の西側までカバーする形で設定されているので、こちらの「文化地区」のコースは東側にシフトする形で設定されているものと思われる。

では、最後に都市の「文化地区」と名づけられたコースに含まれるものとしては少々異色とも思われるこの八番目の文化施設の意義について考え、本論を締めくくりたい。

７．旧市街とマルチプレックス映画館

「1990年にドイツで最初のマルチプレックス映画館がケルン近郊のHürthのショッピングセンターで開館した後、1998年末までドイツでのその数は増え続け、ミニプレックスを含む92の複合映画館の建物ができた。」[30] そしてニュルンベルクでは1995年10月にこのマルチプレックス映画館「シネチッタ」が開館し、そして順次拡張されていった。町の大きな経済圏とこの地方の平均以上の経済力のおかげで、開館後入場者は飛躍的に伸びていった。すでに2012年末で累積の入場者数が3,000万人を数えたことをそのホームページで伝えており、今に至るまで順調に来訪者数を伸ばしていることを窺わせている。シネチッタは当初より映画鑑賞を越える娯楽施設としての機能の開発に努め、多様な飲食、飽きさせないイベント、そして市の中心部との最高の接続等を念頭に置いた事業の展開を心がけて来た[31]。そのためドイツではこのような映画館が比較的若い層の社交場として受け入れられたという経緯がある。「マルチプレックス映画館は、出会いの場・語らいの場として特に若い人々に大変愛されている。それで映画館を訪れる人の60％以上が30歳以下であり、50％が学校の生徒、学生、職業訓練生なのである。」[32] それだからこのような映画館の施設は次のようになる。二つの入場ホールには、カフェバーが併設されている。ロビーや各ホールの客に飲み物や簡単な食べ物を提供する全部で12のバーがあり、そのそばにはさらに４つのレストランがある。さらにポップコーン売店、カフェ、６ヶ所の屋外テラス、DVDショップ、DVDレンタル、書店などが展開されている。17の大小様々のホール（103から547席までの）があり、その他に、多目的ホール、MAD（Motion-Ride-Kino）、DVD-Studio-Kino、Deluxe-Kino（2013年に新設）などがあり、さらに518席の座席と600m^{2}の巨大スクリーンならびに840m^{2}のドーム型スクリーンをもつホールCinemagnum 3Dがある。これは約２万立方メートルの巨大空間であり、32メートル以上の地下部分につくられている。この複合映画館は全部で地下６階にまで達する構造物である。このスクリー

ンの数、この施設の規模はドイツでも一二を争う規模である。この映画館の周囲は中世の防壁、産業博物館、カタリーナ修道院跡などの歴史的なものの残る地区なので、目立たないようにこのように地下構造でつくられたのだ。このような配慮もあってニュルンベルク市は中世都市の外観を維持し、その結果がアンケートにあったように、「町の訪問者（土曜日の訪問者の56％）が特に気に入っている町の景観」という評価につながっていると言うことができる。そして中世都市の景観を保っているがゆえに観光客に人気の都市ではあるのだが、このようなシネマコンプレックスすらもこの旧市街につくることによって、ショッピングと合わせて若者をも引きつける場所としているという町づくりの工夫もみられる。このシネチッタという施設が「文化地区」の指定コースにも含まれていることからも分かるように、市はこの施設に文化的意義をも見出しており、その文化的施設の意義に自信をのぞかせているとも言える。人口50万人のニュルンベルク市の狭い旧市街の地区につくられた施設にしては規模が大きすぎるような気がするのであるが、開館後17年経ても入場者を順調に伸ばしているところを見ると成功していると言ってよい。表にもあったように、ニュルンベルクは「遠隔地からの来訪者」も多く引き付けている町と言え、この施設目的の来訪者もあるであろう。その意味で、この施設が町全体の価値を高めていると言えるのである。

8．結　　び

ニュルンベルクは第二次世界大戦後に破壊された旧市街を再建し、その華々しい町の歴史をしのぶことのできる中世の町（「歴史地区」）としての雰囲気を維持し続けた。さらに歩行者専用区域を順次拡大して市内散策をする者にとっての魅力を高め、また旧市街のなかに人気の文化施設シネマコンプレックス（「文化地区」）を埋め込むことによって近隣の若者をも惹きつけている。そうすることによって古い歴史のある町のポテンシャルを存分に生かし切り、活気ある町にすることに成功しているということが言える。「都市の視点からマルチプレックス映画館はそれぞれの都市像に適合するべきであり、また都市の多様な文化的生活に寄与すべきである。立地点が適切ならば、マルチプレックス映画館は突出した投資となる。そしてそれは、しばしば駅に近い都心の魅力を維持し、高める働きをする。」[33)]

人口50万人のニュルンベルクは、旧市街の外にも大きく広がった都市であり、マルチプレックス映画館の大きな建物を地上に建設するのに適した旧市街の外の市街地はいくらでもあった筈である。しかしこのマルチプレックス映画館を建設するのに地下構造に移してまでも中央駅の近くを選んだ選択には、驚きを禁じ得ない。都市の中心部である旧市街でこそ豊かな生活は営まれるべきであるというコンセンサスができている証拠であると思うのである。

参考文献

魚住昌良『世界歴史の旅・ドイツ』（山川出版社，2002年）

阿部謹也『中世の窓から』（朝日新聞社，1984年）

マックス・フォン・ベーン『ビーダーマイヤー時代』（三修社，1993年）

ドルーシュ編『ヨーロッパの歴史第２版』（東京書籍，2000年）

Donath, Matthias: Nürnberg 1933-1945.（2010 Petersberg）

Wietzorek, Paul: Das historische Nürnberg（2011 Petersberg）

Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland. Bd.5 Dörfer und Städte.（2002 Institut für Länderkunde Leipzig）（Nationalatlas Bd.5と略記する）

Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland. Bd.10 Freizeit und Tourismus.（2000 Institut für Länderkunde Leipzig）（Nationalatlas Bd.10と略記する）

シネチッタホームページ　www.cinecitta.de/

ニュルンベルク市ホームページ　www.nürnberg.de/

注

1）Donath, Matthias, S.125

2）魚住昌良，154頁

3）Wietzorek, Paul, S.18

4）ebenda, S.18

5）Monheim, Rolf „Nutzung und Verkehrserschließung von Innenstädten“（In: Nationalatlas Bd.5. S.135）

　図１は上記論文より転載。点線が「歴史地区」および「文化地区」のルートである。

6）Wietzorek, Paul, S.111

7）Donath, Matthias, S.6

8）ドルーシュ編『ヨーロッパの歴史第２版』，146頁

9）nuernbergerinfos. de „Nürnberger Tand“（2015年３

月15日閲覧）

10）Wietzorek, Paul, S.21

11）阿部謹也，28頁

12）マックス・フォン・ベーン，171頁

13）Wietzorek, Paul, S.26

14）Donath, Matthias, S.125

15）Wietzorek, Paul, S.28

16）Donath, Matthias, S.125

17）Statistisches Informationssystem Nürnberg. www.daten.statistik.nuernberg.de（2013年5月5日閲覧）
図2は、ニュルンベルクホームページのStadtplan Nürnbergより転載。
SebaldとLorenzの二つの地区からなる中央の部分がニュルンベルクの旧市街である。その西方にGostenhofがあり、そのすぐ上にSt. Johannisが、そして旧市街のすぐ東にWöhrd地区がある。

18）Wietzorek, Paul, S.28

19）Bode, Volker „Kriegszerstörung und Wiederaufbau deutscher Städte nach 1945“（In: Nationalatlas Bd.5. S.88）

20）Donath, Matthias, S.41

21）Freund, Bodo, „Die City-Entwicklung und Trends“（In: Nationalatlas Bd.5. S.136）

22）Monheim, Rolf, a.a.O. S.132

23）ebenda, S.135

24）ebenda, S.135

25）ebenda, S.133

26）ebenda, S.135

27）ebenda, S.134

28）ebenda, S.135

29）Nuernberg. Bayern-online.de（2015年3月17日閲覧）

30）Ulbert, Hans-Jürgen „Multiplexkinos - moderne Freizeitgroßeinrichtungen“（In:Nationalatlas Bd.10. S.78）

31）シネチッタホームページ（2015年8月14日閲覧）

32）Ulbert, Hans-Jürgen, a.a.O. S.78

33）ebenda, S.78

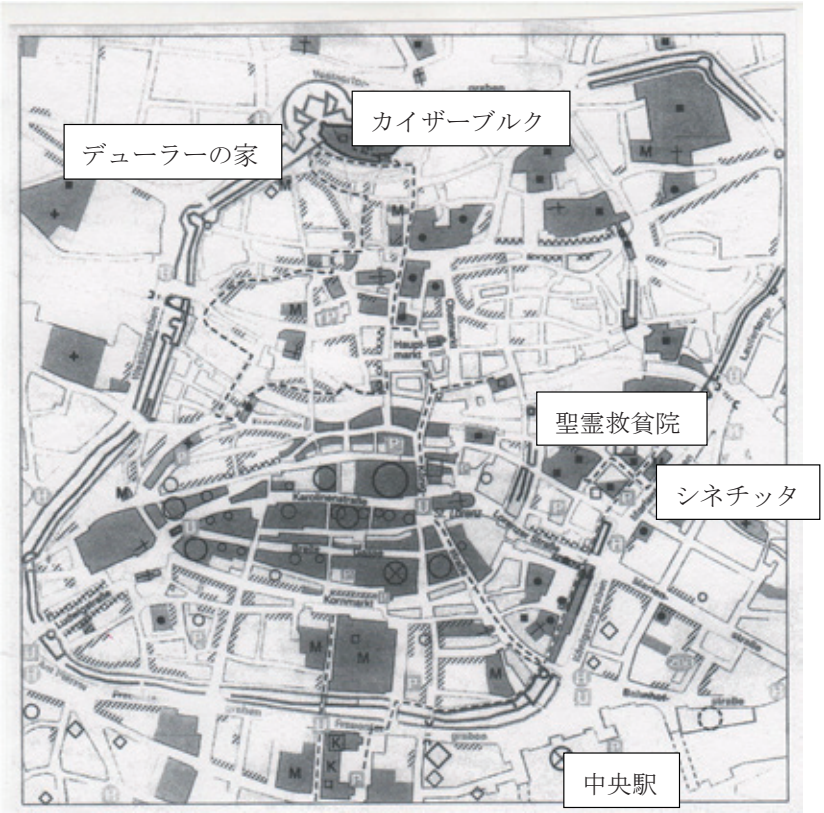

図1

Maxfeld
Schop-
pershof
St.
Johannis
Gärten
h. d.V.
Rennweg
Gärten
b. W.
Kleinweiden-
mühle
Sebald
Wöhrd
Gostenhof
Lorenz
St.
Peter
Tafel-hof
St.
Leonhard
Galgenhof
Stein-
bühl
Gleiß-
hammer
© Luftbild: Geobasisdaten © Bayerische Vermessungsverwaltung 2014; © Karte: Stadt Nürnbe

図 2